

ベルギー、フランダースの犬のアントワープへの道

富永 義則 (昭44)

今回はブリュッセルを首都とするベルギーの話。ゲルマンとラテンの2大民族の融合したベルギーは“ヨーロッパの心臓”と呼ばれている。今回の学会はそのベルギー北部の町、アントワープで開催された。ここは日本ではおなじみの、あの“フランダースの犬”で有名なところ、是が非ともルーベンスを訪ねたいところである。

2004年6月28日、台風6, 7号一過の後で、梅雨の中でも運よく快晴に恵まれての日本脱出となった。まだ6月なのに連日30度を越す真夏日が続いていた。ものの本によるとベルギーの6月は日本の4月ごろの気候と聞いていた。絶好の避暑になる。今回の学会への参加はハンガリーでの第5回以来5回目の参加で、常連の参加者をはじめかなり知りあいができ、学会の雰囲気にもなれてきたところであった。しかし、今回ほど疲労を感じたことはなかった。学会の準備もいつもよりは早めに始め、参加の手続きも万全にしたつもりであった。長崎から関空を経てベルギーのアムステルダム空港までの長い旅路、この12時間が今回ほど長く感じたことは無かった。4月からの新転地でも仕事等のこともあり、少々疲れが残っていたのだろうか、それともそれなりの歳になっていたのか、妙に緊張し、体調が芳しくない。機内での2回の食事にも気を使い、12時間がこんなに長く感じた旅行はこれまで経験が無い。しかし7～8時間も経つと体調も大分回復し外の景色も目に入る様になってきた。テレビの画面でみる飛行航路からするとバルト海近くにきている事がわかる。デンマークからオランダに架けて海は茶色になっている。これはヨーロッパの大河の河口に近いためだろう。しばらくすると地図でおなじみのあの堆積した列島や長い干拓の堤防がみえた。海を仕切っている巨大な堤防もここからは一本のヒモの様に見える。さらに高度が下がると、森や牧草地、それに整然とした畑、それを囲むクリークがはっきりと見える。これがオランダからベルギーまでずーっと続いている。一切山や丘らしき

ものはなにも見えない。こんなにはっきりと外が見えたのもめずらしかった。外を見ているとそれまでの体調不良の感覚は薄れていった。まもなくアムステルダムの空港に着いた。ベルギーに入るには、このアムステルダム・スキポール空港から電車でいく必要がある。この電車のホームは空港の地下にあり非常に便利になっている。ここからヨーロッパの各地に行ける。ホームで待っている間も、フランス夫人から、パリに行くのはこのホームで良いか聞かれる。列車番号が同じなのでこのホームで正しいことを告げると色々ときげに話をする。10日間近くヨーロッパを旅行してきたとのこと。また別の人からはデン・ハーグに行くにはこのホームで正しいかと聞かれる。しかしデン・ハーグがどこに有るのか知らない。まもなくパリ行きの黄色タリスが到着した。これまでもユウロスター等何回かヨーロッパの電車に乗ってきたが、タリスは今回が初めての経験となる。あらかじめ日本の旅行代理店での指定席予約で簡単に席を見つけることができた。ヨーロッパの駅ではいづこも改札がない、電車に乗った後、しばらくして検札がある。今回の急行では途中、飲み物とケーキの無料サービスがあった。2時間の間に2回このサービスがあったが、弱気になり1回しか取れなかった。車窓からみるオランダの風景は見慣れている気になる。風車こそ見えないが本でよく見たような風景である。ほとんどが四角に区切られた牧草地、そこには10～20頭位の白黒や白茶の牛、それに馬がいる。それぞれの牧草やぶどう畑、それに小麦らしきもの、微妙に緑色が違う、それをまた別の緑のクリークが囲む、緑に囲まれた車窓であった。短く感じた2時間であった。駅はアントワープに着くものと思っていたが、ベルヘムという駅で下車せざるをえなかった。アントワープ駅はここから別の線で行かなくてはならない。そこでどのくらいの距離かわからないままタクシーでアントワープまで行った。14～5分で着いた予約のホテルは、アントワープ駅の真ん前で

1分とかからない距離であった。もうすでに午後7時近くになっているのに、日本の5時くらいの感じで明るい。しかし町は何かごたごたしている。道路も広くない。建物も古いのか新しいのかわからない。人も東洋系から、アフリカ、それに各ヨーロッパ人と、これも雑多、しかし何か明るい自由さを感じる。まだ睡眠を取るには明るすぎる。そこで近くを散策することにした。ホテルでのチェックインを済ませ、あらためてアントワープ駅を見てみると、それは30メートル近い古い大きな石造りの駅であった。1895年から10年かけて建築されたとのこと。プラットホームは6列からなる比較的大きな駅であった。この6本のホームが一つの大きなドームの下にある。よくヨーロッパの駅で見かける風景である。「この駅の向こうは動物園、その横はダイヤモンド博物館、北側の広場は工事中、さらに左側の西は駅前のメインストリート、しかし車は一方通行、車道の半分は両側に駐車している車で占拠され、歩道の方はレストランの客席が所狭しと迫出している。さらにあちこちで工事中、なんとも混雑した町である」との第一印象であった。いづこも道路は広くなくごたごたしているが、駅前が特にひどかっただけであった。

ホテルの反対側の店はなにかきらびやかである。この一角があのかぎりのベルギーダイヤモンドで有名な町であった。アントワープ駅の地下の駅はダイヤモンドステーションと呼ばれるほど、ダイヤモンドで有名な町であった。駅からずーっと高架橋の下は25番と店番号が付いている様にびっしりとダイヤモンド関係の店ばかりである。また、その1キロ四方の周りほとんどダイヤモンド関係の大小の店が並んでいる。世界のダイヤモンド原石の70%以上がここに持ち込まれ研磨されるといわれている。アントワープにある4軒の取引所のうちその3軒がこの駅の近くにあるという。ここにヨーロッパでも有数のユダヤ人社会が形成されている。あの独特の黒い帽子に黒いマントの様な服装をこの町でよく見かけた。この人たちが敬虔な戒律厳しいユダヤ教の人たちであった。またイスラムの人らしいスカーフをした人も多く見かけた。ベルギーは70%以上がカソリックだそうである。

アントワープの町

オランダ国境から30kmほどのベルギー北部にあるアントワープは、日本人にあのアニメの「フランダースの犬」で知られている人口50万の町で、またヨーロッパ有数の港でもある。しかし何と言っても前にふれたダイヤモンドだろう。普通はダイヤモンドとは縁の無い私でも、ショウインドをついつい見てしまう。挙げ句のはては、研磨の実演にはまりこむ。また見る角度によってきらきらと輝く虹の光に魅せられる。知らぬ間に説明を聞いている。色々な国の人が店を構えているらしい。その中でもユダヤ人の組織が圧倒的に大きいらしい。

このダイヤモンドの次に気になるのが、ネロ少年があこがれたルーベンスの絵だろう。レンブラントは見たことあるが、ルーベンスは淡路島の大塚美術館で数点見ただけであった。その本物がみられる。それだけでもベルギーに来た甲斐がある。ルーベンスの家が、アントワープ駅から港に向かって15分くらい歩いた所に博物館として開放されている。ここにはルーベンスが使用したと思われるタイプの調度品が再収集されている。当然多くのルーベンスの絵が展示されている。あの有名な自画像が心に残っている。しかし、あまり色々みると一つ一つが記憶に残らない。これらの絵の世界一のコレクションとなっている王立美術館の絵には圧倒される。さらに近くにあるノートルダム大寺院のネロ少年を魅了したであろう「キリストの昇架」「キリストの降架」「聖母被昇天」に感激した。やはりこれらの絵は美術館に有るよりも教会に有るのが良い。当然この大寺院の周りは観光スポットになっている。駅からこの寺院近くは歩いて回れる。さらに港の辺まで回ろうとするには観光バスがよい。このバスはアントワープの駅の近くから出発し、おまけに日本語のガイドまで付いていて、1時間半ぐらいでアントワープの町を一周する。

学会参加

参加した学会は2年ごとに開かれ、今回で第9回になる。参加者はヨーロッパを中心に100人位で、それほど大きくない複素環境系の学会である。これまで第5回のハンガリーから連続で参加して

いる。かつては多くの日本人がこの分野の研究に携わっていた。今では大学関係の研究者は少なく、今回も日本から参加したのは北里大学の先生、長崎工業技術センターの人、それに私だけであった。製薬会社や農業関係の会社では現在でも活発に研究されているが、これらの人の学会参加が無いのは若干寂しい感じがする。これも私の宣伝が不十分と反省している。次回はもう少し他に呼びかけてみようと思う。

今回の学会はアントワープ大学のレミラ教授を議長にアントワープ大学で開催された。学会の場所がノートルダム大寺院の近くにあることから察せられるように古い歴史を有するベルギー屈指の名門大学である。しかし、現在の日本と同じく大学の再編統合が進んでいて、9ヵ月前に再出発したばかりとの説明がなされた。学会の場所となっている大学は前回のイタリア、フェララ市の大学や、ハンガリー、ゼンメルワイズ大学のように通りに直接面した建物となっており、この建物が1800年代の古くも貫禄のある建物で町の一角を成している。そこの門を潜ると中庭になっており、その先に学会の場所が有る。その3階に受付が有る。もちろんエレベーター等ない。学会の参加登録を済ませ、オープニングセレモニーの会場へと進んだ。ここは明日の学会の会場と同じ場所になっている。ここは3階建て3階だから屋根裏部屋になっている。床も板張りにカーペットで、窓は両開きの小さい板張りガラス窓になっている。鉄色レンガの外壁には緑鮮やかな蔦が這っている。屋根は傾斜のある黒褐色の平らな瓦、なんとも言えない趣がある。こんな場所での学会に参加できる幸せを噛みしめておこう。受付には実際の世話をしているバート・マース教授が出迎えてくれた。20分前なのに誰も来ていない。それで前もってe-mailで送っていたパワーポイントの原稿チェックをすることになった。スライドの前半は予定通り、しかし中盤の肝心なところになると大事な写真が写らない、鮮やかな色を見せる予定のスライドなのに、今回の発表は有機電解素子材料についてで、その色が肝心なところであった。実際の色を示してアピールしようと思ったのに、と残念であった。その後も10数枚の写真が全くだめになっていた。しかしこのコピーを持ってきているから

とこの時はそれほど心配していなかった。しかし、その翌日の試写でも写らなかった。後は口頭で説明する意外にないと覚悟をきめた。前夜祭には常連のメンバーがほとんど参加していた。しかし、最も親しくしているハンガリーのマチャシュ教授と、スペインのラビニヤ教授の姿がない。それぞれ関係者に聞いてみると今回は多忙で参加しないとの事、残念であった。それぞれと挨拶を交わし1時間ぐらいでこの場を後にした。

翌日から本格的な学会の始まりである。学会は8時50分から、この時間になると用意された椅子はほとんど満席となっている。アントワープ大学の学長の挨拶、それに化学会の理事と続き、さらに今回の学会の議長レミラ教授の流暢な挨拶が続いた。その後、学会の参加や準備状況等の経過報告がなされ、テイシュラー教授の司会のもとスロベニアのポーランク教授の講演となった。つづいて北里大学の倉沢教授の講演で、先生はエジプトやアメリカでの招待講演の経験も豊富で、今回のフトラジン関係の演題も興味ある内容だった。途中30分のティータイムがあり、午前中の5題の演題も活発な質問で終わった。その後は2時間の昼食の時間となった。レストランはこの会場から歩いて2〜3分のところにある大学のレストランであった。100人ぐら이가楽々と入れるような部屋で、学生食堂とは違い、大学の行事やセミナー、講演会等のために使用されるとのこと。サービスといい、料理の内容といい、一般の高級レストランと比べてもなんの遜色もない。ビールから始まり、白、赤ワインと続き鮭の料理がきて、ここでスペインのようにランチかディナーかと思うようなボリュームの食事ではない。国が違えばやはり食事もちがうと一人で納得しながら、ワインを飲んでいると、大きな皿のステーキがきた。もうパンも食べ十分なような気になっていた。このステーキも他の町のレストランで食べたものよりも柔らかくて美味しかった。しかし、少々食べ過ぎてしまった。


午後からも活発な講演が続いた。日本の学会の様に形だけの座長の質問だけで終わることはない。2日目は午前中が学会で午後からはアントワープ市内観光が企画された。夕方からは学会の場所と同じところになる聖楽堂でのマンダリンの演奏会

に参加した。ここは学会があった場所の1階の部分で外はレンガの壁が緑の蔦で覆われ、内は白の漆喰に天井は古い茶褐色の木造の梁からなり、正面は聖母マリアの像があり、その前が演奏の舞台。それほど広くなく10人位が並ぶと一杯になるような広さを感じられた。演奏はバッハから始まりシューマンと続いていた。演奏者は皆大学の教職員で構成され、100年以上の歴史をもつ、大学でも市でも公認のクラブだそう。この演奏者の中に今回の学会の議長のレミア教授がいたのにはびっくりさせられた。さらにハンガリーから参加していたホイジャ教授がオルガンで伴奏されたのがさらに驚きであった。

3日目はいよいよ発表当日となる。日本からの出発時からの体調不良を少なからず引きずっていたこともあり、これまでの学会よりも緊張してしまった。前者が終わり、司会のオーストリアのウイン大学のハイダー教授の紹介があるときには紹介の内容も聞くことは出来ていた。最初はいつもの形だけの挨拶から始まり、これまでの発表では化学発光についてであったが、今回はこれに加えて電界発光についても話したためにイントロが長くなっていた。イントロの説明も終わり中盤の写真が出てくる場面になると真っ黒な画面だけ、真っ黒な画面が3枚続くことになる。初日の試写のところでこのことはすでに確認はしていたもの

のどきどきであった。しかし、フランスのワーマス教授が状況を判断してか、“マジックの始まりですか”との一言で、すうっと胸の悶えが消えたような感じがした。緊張が取れたような感じがした。「ここに青色、緑色、それにここに赤色があると想像して下さい。この絵は蛍光測定器で、これはグラフです、心眼で見てください」と、もうマジックの世界。後は実際の研究の説明だから、いつもの状態に戻っていたように思う。しかし、最後に長崎や大学、それに環境科学部を紹介する写真も出てこなかったのが残念でした。

学会の最後は午前中で終わった。この間、理事会が開催され次回をどこにするか前日まで決まっていなかった。これまで順調に決まっていたが、主なところはスロベニア、イギリス、それに日本が残っている。最初はイギリスの予定であったが担当者が退職して大学関係者がいなくなったせいもあり、候補地から自然に消えていた。私は帰国の時間の都合で前回イタリアでの理事会には参加できなかったが、その時の話ではフランスも候補地になっていた。しかし理事の一人、ワーマス教授が理事会に間に合わなかったため、スロベニアのスタノビック教授を仮の議長に決め最終日にワーマス教授の出席を待って、それでやっと今回はフランスに決まった。これらの理事会で日本での開催も議論されたが、これまで日本からの参加



**9th International Symposium
on the Chemistry and
Pharmacology of Pyridazines**

Speakers

S. Hirata
S. Saito
T. Saitohara
P. Tognolini
A. Porchia
A. Orlan
G. Cheloni
C. A. Wormald
J. Bero


Speakers

S. Van der Stuyven
S.K. Lee
A. Cheloni
T. M. Sherratt
M. Grollman
C. Nigam
F. Taranzi
J. Bero
J. Bero

Antwerp, June 30th – July 3rd 2004

<p>Organizing Committee</p> <p>Esp. Lantier (U.A.), Chairman Det. Vlieghe (U.A.), Co-Chairman D. Dierckx (U.A.) A. Dierckx (U.A.) C. Cheloni (U.A.) M. Debaere (U.A.) E. Frenay (Laboratoire Sabartier) J. Sabartier (U.A.), Secretary</p>	<p>Scientific Advisory Committee</p> <p>F.F. Szabolc G. Cignarella D. Manno G. Cheloni S. Hirata B. Wormald F. Taranzi C.H. Wormald</p>	<p>Honorary Advisory Committee</p> <p>G. Mannich A. Vlieghe S.K. Lee B. Wormald F. Kopp</p>
---	--	--

Huis de Colvenier



**9th International Symposium
on the Chemistry and
Pharmacology of Pyridazines**

者が少ないことと、さらに最も重要な理由として全ての物価高が懸念された。この学会の参加者のほとんどがヨーロッパのため、日本までの旅費等の経済的負担の大きいことが心配されている。私にもそれらを援助する資金調達の日処も無い。国際学会を日本で開く事の難しさがここにあると思われる。今回の理事会で私自身が開催の名乗りを上げることは出来なかった。しかし、スペインの

ラビニア教授、それにハンガリーのマーチャシュ教授が強く日本での開催を望まれていることもあり、真剣に日本での開催を考えなくてはならないと思っている。

今回も体調はよくなかったが、それなりに貴重な体験となった。次回のフランスに向けて参加できるように頑張ろう、その気持ちの持続が肝心と思っている最近の心境である。

信州松本での昭和44年度卒業同窓会の記録

富永 義則 (昭44)

今回も昭和44年度卒業の級友達が信州松本市に集まった。これは何時からか始まった2年ごとの同級会の一環で、今回は前回の沖縄での会の後、松本市在住の木下が世話役となって開催されたものである。これまでも長崎はもちろん、福岡、岡山、広島、宮崎、鎌倉、沖縄、それに信州と同級生が居るところを順に廻って同窓会を開いてきた。それぞれの場所での思い出、それぞれの語らいの内容は忘れてきているが、比較的深く胸に残っている。月日の経つのは、光陰矢のごとし、で非常に早い。しかし、どんなに月日が経とうとも同窓会で会っての語らいには時の隔たりを感じない、何時もそんな雰囲気である。特に最近はお互いの再会を大切にするように気遣っている感じがする。これまで参加されていない方にも、次回からぜひ参加してほしい。

今回の信州での様子を知らせておきます。今回の同窓会は、平成16年6月5日長野県松本市浅間町の「みやま荘」で、先程も触れたように木下の世話で開かれた。日時場所を決めるのに苦労されたようだったが、結果は大成功で、感謝感謝の松本であった。折しも此の頃は日本のほとんどが梅雨の始まりで天候が気になっていた。しかし、前日(4日)の松本市は快晴で遠くのアルプスの山々がくっきり見えていた。山の頂きには未だ残雪が見られる。この天気が明日まで続いてくれと祈る気持ちで、松本空港からみやま荘までバスを乗り継いで行った。ホテルには5時頃着いたが未だ誰も来ていなかった。暫くすると早めに松本入りし

て、市内観光をしてきた松村、山口、赤堀、西村、小坂らが戻ってきた。意外と少ないのに少々気掛かりになった。参加すると思っていたいつもの大和、星野、藤井、それに白石さんがいない。大和と白石さんは直前体調を崩したとのこと、また藤井さんも高熱を出したとのことで参加できないらしい。少々遅れて、内田、島袋の両人が現われた。広本、それに下野親子は翌日の合流と聞いた。それから何時ものようにわいわいがやがやと前夜祭が始まった。食堂で始まった前夜祭だが、もう時間ですよと退席を促されるまで食堂で語らう事になった。その後も一つの部屋に集まり二次会の開演となった。ビールをはじめアルコールは充分ある。沖縄のアワモリを期待しながら、しかしこの日は出てこなかった。島袋さんにこの日もアワモリを密かに期待していたのです。それで宴会が盛り上がりがない訳はない。ここで話した内容の記憶は定かでないので記する事はできない。しかし語らう事は、今回これなかった人々の消息、それに、自分達の近況報告等々、話は尽きない。それぞれ同級生の事、皆が気にしています。

5日は朝が早い。6時50分には朝食、7時半頃にはホテルを出発。一台のバスに9人は寂しい感じがした。しかし上高地、それにロープウェイの所までは周りの景色に見とれて人数なんて気にならなかった。

谷深い川沿いの、お世辞にも広いとは言えない曲がりくねった、しかもトンネルの多い車道を、行き違いのバス等にヒヤヒヤしながら、時間はあ

まり気にしていなくて、2時間位だったと思う、焼岳の見えるところまで来た。途中の木々の緑の鮮やかさに見とれながら、これが萌葱色かと感心しながら、あの有名な大正池に着いた。手前は薄青色の澄み切った池、その岸边は萌葱色のタケカンバの木々、その向こうにやや褐色の部分のあるウグイス色の山肌、それにバックは夏の空を思わせる群青、一遍の雲もない、稜線には人陰すら確認できそうな程透明に澄み切った空気、そのような周りの景色でした。ここから梓川沿いに田代橋、ウエストーン碑の横を通って、河童橋の所まで周りの景色を満喫しながら、ところどころで記念写真を取りながら行った。橋の上で皆万歳をした。写真に収めたが、あまりにも小さすぎて分かりづらい。しかし人よりも景色がすばらしい。岳沢にはまだ残雪が見られる。ここでも仰ぎ見るバックは群青色、山は碧緑、それに岩肌と残雪、萌葱色の緑、それに梓川、これは私の力では表記できない。

途中帝国ホテルでコーヒブレイク。10時近くになるともう都会なみの人の多さ、全く噂通り、何だろうと思いつつも、山の頂き、稜線を見ると少々元気なら登ってみたいくなるのも当然のような気がする。理解できる。山のりっぱな売店でそれぞれ買い物をして、途中昼食を取り新穂高ロープウェイに向かった。この頃になるとロープウェイの所には下野親子が来ているとの連絡が入る。



ロープウェイの階段の所で下野に会い、元気か、との短い挨拶で、元気なのを確認して、急いでロープウェイに乗車したような気がする。約7分ぐらいで西穂高の展望所に着いた。ここからの眺めがまた天下逸品、焼岳、笠の形をした笠岳、錫杖岳、鎗ヶ岳、北穂高、奥穂高と360度アルプスの山々が一望できる。笠岳の方には雲が出はじめている。この展望所から少し奥穂高の方角に歩き始めた。残雪がある。穂高の途中の西穂山荘もくっきりと見る事ができた。ここから2時間位で行けるとの話。もっと若い時にくればと思いつつも、しかたがないと諦める。あまりの素晴らしさに言葉がない。ただ感心するだけ。なんと幸せなことだ。天の恵みに感謝、企画してくれた木下さんに感謝、参加した皆に感謝。もう何も言う事ない。

感嘆、感激の上高地からホテルに着いてみると、広本さんそれに病のはずの藤井さんが待っていた。「どうしたの」、と藤井さん。熱が下がったから来たとのこと。

しばらくして下野親子も到着した。さあこれから同窓会の始まりです。後は時の経つのも忘れての宴会。昨晚と同様わいわいがやがやの連続。

二次会は例のごとく部屋でアワモリで乾杯。実に楽しい2日間でした。

次回は還暦、平成18年長崎で行います。皆さんの参加に期待しています。



熊 本 か ら

藤原 邦雄 (昭45)

昭和45年卒の皆さんお元気ですか。今年は6月から長い猛暑が続き、また9月には九州地方はたて続けに3つの台風が上陸する等、異常な天候に見回れました。皆さんのところは如何だったでしょうか。まず、誠に残念なことです。同窓生の岡本(旧姓、岡村)睦子さんが、昨年12月に急逝されたことを記さねばなりません。長崎での前回のクラス会(卒後30周年記念会)では元気な姿を拝見していましたので大変な驚きでした。学生時代の彼女は仲間と共にいて、いつも物静かで清楚な方であったように思います。どうぞ安らかな御冥福をお祈り申し上げます。

さて、私は約5年前に(やっと)長葉を離れ(?)、現在、熊本の崇城大学(旧熊本工業大学)に務めています。50歳過ぎでの転職でしたので骨身にこたえて、まだ完全には慣れ切っていないのが本音です。月並みですが、45年卒には熊本出身はいないと思いますので、私の感じる所を紹介します。熊本は長崎とは距離的には極めて近いのに、内陸的で寒暖の差が大きく、町並みは広く平坦で、車道が多く、かつ分かりにくいという、所謂、城下町の特徴があります。其中にあって、崇城大学は市の西側の池田町の小高い山全体が大学キャンパスになっています。大学は現在、工学部と芸術学部から成りますが、来年度からは新たに薬学部が新設されます。更に各学科が統合されて情報学部、及び(私が所属することになる)生物生命学部が誕生します。大学全体の学生数は約4000名弱、現在の工学部の教授数は100名程度で会議には一同が会するので大変な賑わいです。私は、長崎のころは車で直接薬学部の研究室の下まで乗り付けられたのが、今や山の麓に車を駐車して毎朝山登りとなりますので、これが結構、真夏や真冬にはこたえます。同じ年の先生が何気なく“山登り

がしんどくなると定年間近かなのだそうですよ”と話されて思わず絶句しました。長葉とこちら私大の特徴の違いはいろいろとあるようです。一口で言いますと、私大の職員は教育、研究のみならず学生の面倒(厚生指導、就職、オープンキャンパス、企業訪問、父兄懇談会など)を見ることによりかなりの時間がさかれるのは事実です。私大では学生に対して、高い授業料の分だけ、面倒見を良くし、資質の高い特徴のある教育を行うことが不可欠なわけです。従って、その分、先生方と学生の間は結構親密でキャンパス内ではすれ違うたびによく挨拶をしてくれます。また学生は自ら就職活動に大変積極的に取り組む点も薬学とは違うようです。これは現状では就職がなかなか難しいことを自覚しているからでしょう。薬学部卒は免許がある分有利であることを実感します。私はこちらで初めて1年生から4年生までのクラス担任を経験しました。学生のよろず相談係です。殆どが育ちの良い子供達ですが、たまに難題を持ち込む学生がいます。しかしそういう学生がかえって可愛くなりますからこれもまた(因果は巡る)人生なのでしょう。

私は今夏、長崎出身の学生の父兄懇談会で長崎を訪問しました(?)。驚いたことに長崎高速道を降りたところに長崎港がありました。“3日見ぬま間の桜”でした。遠くにおられる同窓生の皆さん!! 還暦を迎える前に、或はそれを記念して、長崎を思い出し、尋ねて下さい。港の付近の様変わりはずっと感動を与えますよ!! また今年改築され大変立派になった長葉も是非見て下さい。

尚、我等45年卒の次回同窓会は1年延期して、中村博 大兄(現・長崎市薬剤師会会長、同県副会長)のお世話で、平成18年に長崎で行うように計画しています。それまで皆さんお元気で!!

47年卒同窓会イン広島

森 賢造 (昭47)

前回の台湾から3年目の今年11月20日、21日に広島市において卒業後5回目の同窓会を行いました。やっと秋らしくなった広島市に各地から30名の仲間が集まりました。今回は広島市の繁華街にある酔心本店を会場に、午後6時に始まりました。中には卒業後同窓会への出席が今回初めての仲間も顔を見せ、実に32年ぶりの再会になりました。乾杯の後出席者1人ずつに現在の状況報告をしてもらいました。前回の同窓会では居なかった孫の誕生の報告が数人の方からあり、改めて年の流れを感じさせられました。一次会の後は全員で胡講で賑わう繁華街を歩いて二次会に移動、カラオケなどを楽しみながら夜遅くまで昔話や近況報告に

花が咲きました。

翌日は所用で参加できない数人を除いて、朝9時に広島駅を出発し、紅葉が盛りの安芸の宮島に向かいました。今年の台風18号で左楽房が倒壊した厳島神社も修復が進み多くの観光客でにぎわっていました。今年は紅葉が遅くちょうど見頃で、すばらしい天気の下、ロープウェイで山頂まで登り、瀬戸内海の景色と美しい紅葉を楽しんできました。昼食のあと3年後の再会を誓って散会しました。なお次回は卒業35周年に当たる3年後に東京で行う事になりました。

次回はもっと多くの参加者で盛大に35周年を迎えたいです。



参加者名 (すべて旧姓),

後列 森, 梶原, 橋本, 金子, 間瀬田, 岡本, 風早, 村岡 (都), 小笠原, 猪平, 松田,

中列 榎永, 上原, 山内, 大間, 小寺, 宮垣, 芳賀, 中田, 福間, 古屋,

前列 杉本, 住吉谷, 岸高, 岸, 簗田, 池田, 松村, 山本, 加藤

昭和48年卒の卒後30年クラス会便り

渡部（木原）クリ子（昭48）

昨年の平成15年11月2日（日曜日）午後5時から、長崎厚生年金会館（ウェルシティー長崎）において、昭和48年卒後30年のクラス会が行われた。生憎の雨模様であったが、長崎在住の方々のご尽力により、新潟、東京、大阪や四国等からも駆け付け参加者47名という盛会であった。

私は昭和49年6月に医学部原研放射を辞め帰省し、その後11月に上京、ずっと長崎には行かなかったが、久しぶりに、昨年3月、薬学会年会長崎大会に参加する機会を得た。30年ぶりに薬学部まで行ったが、春休み中また工事中という状況で、人影も疎らな状態であった。

学会から帰った後、しばらくして、クラス会のご案内があり、東京在住の数人も参加する情報を得たため、もう一度長崎まで30年ぶりの友人達に会いに行くことにした。

長崎空港へ降り立ったら何と東京組のメンバーが同じ飛行機だったらしく、リムジンバスの中は既にクラス会状態で、賑やかなことこの上なしといった風体であった。丁度乗り合わせた無関係の乗客には申し訳なかったが…

クラス会ではすぐに学生時代の顔が浮かび、30年経っても、一緒に学び、実験し、苦労(?)して卒業した仲間っていいなあと痛感し、とてもうれしかった。

話は尽きず、2次会会場へと雪崩れ込み、夜遅

くまで飲めや歌えの大騒ぎとなった次第である。その場の詳細は他のシラフに近い方に譲るとして、このクラス会の企画、準備にご努力された幹事の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございます。

今度は5年後にクラス会を開催しようということで、解散となった。

今回参加できなかった方は、次回、是非、参加してください。

また、私は長葉同窓会関東支部で毎年、総会のお手伝いをしているが、関東支部では昨年、総会の前に「卒後セミナー」を開催し、卒業生以外へも参加を呼びかけるなど、先輩達が活動を開始している。

今年の6月の総会では、日本大学医学部法医学教室教授の押田先生をお招きし、「医療・調剤事故とリスクマネジメント」という題で基調講演をお願いした。続いて、シンポジウムに移り、各分野で活躍されている卒業生からの発表があり、大変有意義なセミナーであった。

若い後輩達ももっと参加できる同窓会となるためには、魅力ある卒後セミナーの開催も一手段であろう。

講師やシンポジストへの招聘があったら、是非、協力してください。そして、セミナーへ参加してください。以上、クラス会及び同窓会報告でした。

雑

野川¹⁾は、国分寺にその源を発し、小金井、三鷹、調布、狛江を通り、世田谷の二子玉川で多摩川と合流する。数億年前に多摩川が武蔵野台地を削って作り上げた国分寺崖線の湧水を集めながら、野川は武蔵野の地を南東方向へ流れていく。

私が社会人として働き始めて既に四半世紀、そ

感

角 邦男（昭50）

してこの野川が流れる調布市に移って22年が過ぎようとしている。入社してすぐに開発が始まった抗がん剤は10年前に承認され、海外から導入した別の抗がん剤の開発もすでに数年が経過し、ゴール目前である。入社当時53kg程度であった私の体重は今や67kg、ウエストも70cmから86cmまで拡大

の一方をたどり、当時黒々としていた髪はすでにグレー、量も格段に少なくなっている。

先日、芳本教授（生物工学）に、小学生から一般までを対象にしたバイオ・サマースクールという市民講座で講演するよう依頼された。私のテーマは、中国原産の樹木から得られた抗がん物質を医薬品として開発したときの概略であったが、小中学生のみならず高校生にとってもかなり難しい内容ではなかったかと反省している。それはさておき、市民講座では旧製造工学教室の先輩である林田真二郎さん（長工醤油）や後輩の伊藤助教授（生物工学）を初めとした数人の演者からいろんな分野の面白い話題が提供されていた。会場で、北村美江さん（薬用植物園）と山田（松尾）三和子さんに会うことができ、北村さんの研究室でお茶をいただきながら昔話に花を咲かせた。

帰りの飛行機の中で、その昔母の死をきっかけとして、抗がん剤を開発しこの病気を克服したいとの淡い期待を抱いたことを思い出した。就職した会社は食品会社であったが、運のいいことに当時設立されたばかりの医薬品部門では抗がん剤の開発が開始されていた。数年後、同期で入社した私の酒飲み友達が、植物から得られた抗がん物質を基に高い効果を有する物質の半合成に成功し²⁾、その時から基礎から臨床までの一連の仕事が始まった。活性化に関与する酵素の同定を鶴教授（製造工学）にお願いしたこともあった³⁾。臨床開発から市販後にかけては安全対策に苦労させられたが、海外では大腸がんの第一選択薬として広く用いられるようにもなった^{4,5)}。

四半世紀後の現在、昔日の期待は現実として目の前に存在し、その夢は果たされたかにも思える。が、何か未だ本物ではなく、さらにいい物を開発したいという思いが存在する。それは、真の意味でのがんを治す薬を我々が手に入れていないことに起因するものかもしれない。ヒトゲノムの解析やそれに伴う分子標的薬の登場で、抗がん剤に限らず薬剤の開発は大幅に進むかに見える。しかし、

本当にかんが治る薬、副作用が少ない薬としての抗がん剤の開発はこれからが正念場なのだと考えるとき、その思いは薬学を目指して長崎大学に入学し、卒業して社会人になった頃の淡い期待と同種のものとして感じられるのである。

野川は、先日の台風の影響で水量が増し、勢いよく流れている。その流れは、現在の環境が昔とは随分違っているにも拘らず、数億年前と何ら変わることはない。それは、まるで野川が奏でる雄大なパッサカリア⁶⁾の basso ostinato のようであり、人々はその流れとともに様々な変奏曲を日々の生活の営みとして演奏している。そして、私もその中の一人なのだ。

References

1. <http://www.education.ne.jp/kyoiku-center-mi/river/mokuzi.html>
2. Sawada S, Yokokura T et al. Synthesis and antitumor activity of 20(S)-camptothecin derivatives: Carbamate-linked, water-soluble derivatives of 7-ethyl-10-hydroxy camptothecin. *Chem Pharm Bull* 39, 1446-1454, 1991.
3. Tsuji T, Kaneda N, et al. CPT-11 converting enzyme from rat serum: purification and some properties. *J Pharmacobiodyn.* 14, 341-349, 1991
4. Saltz LB, Cox JV, et al. Irinotecan plus fluorouracil and leucovorin for metastatic colorectal cancer. *N Engl J Med*, 343, 905-914, 2000.
5. Douillard JY, Cunningham D, et al. Irinotecan combined with fluorouracil compared with fluorouracil alone as first-line treatment for metastatic colorectal cancer: a multicentre randomised trial. *Lancet*, 355, 1041-1047, 2000.
6. http://www.yamaha.co.jp/edu/student/museum/yougo/youg_ha.html